

第4節 埼玉県立杉戸高等学校教諭に任ぜられる

1. 在職中の経過

全国高総文祭「埼玉」

平成4(1992)年に現在の杉戸高校に着任した。高等学校文化連盟主催の全国大会「埼玉」を年に控えての転勤だった。総合開会式の企画委員と吹奏楽部門開催の部長という二つの役職を持ったために、他の外郭団体すべて、高音研・吹奏楽連盟から退き、捨て石になる覚悟でやった。全国大会が終わって、すべての役職から開放されたときに杉高での生活は残り7年半だった。

学校の中の仕事

授業は自分のスタイルができ上っていた。外郭団体の仕事も一段落ついてフリーになった。教師としてやらなければならない仕事は、学校の中核で「良い学校にするために仕事をする」ことだった。幸いにして気力と体力は健在だった。平成6年3月に近隣の学校の学校要覧を徹的に目を通して教務部の組織を整えて教務部をスタートさせた。組織の充実に外郭団体で苦勞を重ねた経験が生きた。教務主任になった平成6年4月からは、まず入試業務の校内基準の成文化に意を注いだ。平成7年は杉高創立20周年が巡ってきた。この資料づくりにも組織の充実に意を注いだ。外郭団体にいた経験がここでも生きた。平成9年には、職員間の声によって、校務分掌組織作成基準の見直しに着手した。校務分掌で教師達が逃げたりする学校は最低だと思う。公立高校入試選抜業務で一部の人間の意向によって合否が左右される学校も容認できない。教師の負担過重を無視した行事予定編成には憤りを感じる。平成9年の教務主任は川辺先生。平成10年にまた、私が教務主任になった。平成10年10月8日、全日本音楽教育研究会高等学校部会全国大会「埼玉大会」が大宮ソニックシティで開かれて、国際会議室で私が創作の公開授業を行った。研究資料の巻末に「新教育課程に思うことなど」を載せた(随想の項目参照)。公開授業の結果は上々で好評であった。平成13年8月に全国高文連「福岡大会」が開催される。その吹奏楽部門に杉戸高校吹奏楽部が推薦された。これで杉高吹奏楽部に尽くすことができた。私は杉高学力のレベルアップにも力を入れた。教育現場の民主化はその一環だった。学校運営は分掌を整備して、各会議の合意の積み重ねで動いていくことが正しいと思う。最終且つ最高の決定機関である職員会議は、意見が出尽くして、全員の合意で承認されることが理想あり、その通りになった。杉高の職員室は和やかになった。このところの杉高の入試倍率は年々上昇していて、平成13年度は、1.51倍になった。これを契機として職員室の雰囲気が一変したように私には感じられる。以前にもましてやる気がみなぎってきた。これで私の杉高でやらなければならないことは終わったように思われた。

2. 部活動

吹奏楽部は、やはりそれ程の成果を挙げられなかった。杉戸高校在任中の9年間にB部で関大会金賞受賞1回、予選金賞県大会銀賞3回、予選銀賞2回、受賞なし2回であった。大した成果も挙げられずに、打ちのめされながらも、翌年のコンクールが近づくと、また張り切って取りんで、また打ちのめされることの連続であった。

教職生活38年間も、よくこのようなことを繰り返してきたと思う。



創立20周年記念式典当日(H.8)奥貫教頭、神部校長両先生と私

私はついに吹奏楽コンクールではトップクラスに食い込むことが出来なかつた。何故だろう

とときどき考えた。埼玉県内トップクラスにいる吹奏楽顧問の先生方は、コンクールに自分の教員生活と人生そのものをかけておられる。私はそうではなく、人生そのものをかけているのは作曲活動で、吹奏楽は管弦楽法を極めればよかったのだ。その差がコンクールの成績の差として現れたのではないかと考えられる。夜遅くまでの練習よりも生徒の安全な下校を優先させた。生徒の学習活動と部活動両立を考えた。自分が部活動にのめり込みたくても、職員間との共通意思の疏通を図る。学校教育の範囲内での部活動のあり方が、自分の心の中にあった。コンクール実績を上げることが、人生の第一義ではなかった。それでも練習しているときには、全身全霊を傾けて取り組んだ。このような私は、練習に打ち込む火のような自分の熱意と、時間だから早く帰れと指導する姿勢に、矛盾があったのかも知れない。

杉戸高校に私が赴任したときには、すでに埼玉県教育委員会に体育課が設置され、午後5時学校現場の完全下校時間がすでに撤廃されていた。春日部高校では定時制があつて5時以後は活動ができなかったが、杉戸高校では午後5時以後でも部活動をやった。私は吹奏楽部の部活時間を6時半迄とし、7時半を全員下校時間にした。私は教育に対する自分の信念を曲げて、コンクール実績を上げるために、もっと遅くまで部活動をやるべきだったろうか。当時何度も自問したことがあるが、私はそれをやらなかった。理由は第一に教育現場の部活動の完全下校時間撤廃は、学校教育の範囲を超えていると考えていたこと。第二に家に帰っての生徒達の時間が必だと考えていたこと。第三に自分がコンクールで上位の成績が欲しいがために、生徒に遅くまで部活をさせることは、他の先生方のお考えはともかく、私の考え方では、自己満足の手段のために部活動を使っていることであり、教育の範囲を逸脱した教師のエゴに他ならないと考えたからだ。しかし、コンクールの結果が思わしくなかったときには、私はコンクールの成績では神から見放れているのではないかとよく感じていた。コンクール実績を上げるといふ一点だけで考えれば、私の姿勢は確かに矛盾していた。何がなんでも金賞を取るんだという気概がなければ、絶対にトップクラスに入ることはできなかったのである。

1. 吹奏楽への編曲

杉戸高校時代の編曲版を以下の通り記載する。杉戸高等学校校歌管弦楽版(1994.9.5管弦楽鑑賞会初演)、カルメン組曲より「ハバネラ」ほか吹奏楽版(1998.3定期演奏会初演)、「胡桃割り形」吹奏楽版(1999.3定期演奏会初演)、交響曲第9番「新世界より」全曲吹奏楽版(2000.定期演奏会初演)、「眠れる森の美女」全曲



着任当時の定期演奏会



関東大会出場記念(H.10)

奏楽版(2001.3定期演奏会初演)

吹奏楽をやることで管弦楽法を私が身にけることができた。春日部高校時代から編曲を手がけてきたが、杉戸高校時代に至って、完璧に習得できたと言ってよい。チャイコフキーの二管編成の管弦楽法、ホルストの三管編成の管弦楽法を吹奏楽への編曲を通して理解できた。管弦楽作品を高校生に原譜のまま演奏させるのが不可能な場合は、やさしく書き換えることもできた。吹奏楽オリジナル作品の杉戸高校スタイルでの編曲やり直しも手がけられるようになった。このような事柄は楽器を知りつくさなければできないことである。

関東大会出場記念(H.10)

4. 杉戸高校時代の作品

杉戸高校時代の私の作曲作品は以下の通りある。VITA（生命）ーピアノ・ソロのためのー(1992.7.9 第11回蒼初演)、歌曲「ひみつ」鈴盛子作詞(1992.9.24第25回詩と音楽の会・音楽の友社刊行)、「ディアログ」ーフルートとピアノのためのー(1993.7.8第12回蒼初演)、ハーブシコード三章(1994.7.7第13回蒼初演)、歌曲「仮面」宮川澄子作詞(1994.9.29第27回詩と音楽の会・音楽の友社刊行)、「投影」ー弦楽四重奏のためのー(1995.7.6第14回蒼初演)、歌曲「幻影」柴田忠夫作詞(1995.9.27第28回詩と音楽の会・音楽の友社刊行)、「響」ーBトクラリネットのためのー(1996.7.11第15回蒼初演)、「ネイチャー」ー金管5重奏のためのー(1997.7.7第16回蒼演)、歌曲「さくら月宵」三枝ゆり子作詞(1998.5.27第31回詩と音楽の会・音楽の友社刊行)、「リフレッシュオーネ」ー2人のチェリストのためのー(1998.7.9第17回蒼初演)、「会話」ーアルトサクソフォンとピアノのためのー(1999.7.9第18回蒼初演)、歌曲「手紙の伝説」山田賢二作詞(1999.10.1第32回詩と音楽の会初演)、歌劇「なよたけ」全幕手書きピアノ・スコア完成製(2000.5.31)、ダブルベースとピアノのための会話ー「翁」ー(2000.7.6第19回蒼初演)、歌曲「柿の若葉に」浅田真知作詞(2000.7.31第33回 詩と音楽の会初演)。

5. 定年退職

平成13(2001)年3月、以上で私の現役時代は幕を閉じた。このように書き連ねてきても、回想しても実に早い年月であった。健康で過ごせたことが大変にありがたいことであった。私は教師として、自分でやらなければならない仕事をやらなかったことは一度もないと思っている。従って、幸いにして仕事をやらないがために悔いを残したと感じたことも一度もない。健康に恵れ、気力の衰えも感じることなく教師生活を終えることができた。なんとうれしいことか。そう言えば酒宴の席の出席を断ったことは、現役時代一度もない。

酒宴の席で盃を私の方に傾けて、注がれるのを断ったことも一度も

なく、二次会・三次会・四次会と会を重ねるのも毎度のこと、いつも最後まで飲んでい。それでも体を壊すこともなく、翌日に二日酔いの嫌な匂いをせるでもなかった。幸いにして現在も健康体でいられることは、神に感謝しても余りに違いない。



土肥泰先生退官記念祝賀会(H.8)